様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３３７０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０７７３

研究課題名（和文）希望を主題とする道徳教育の理論的形成と創造的実践に関する研究

研究課題名（英文）Theoretical and Practical Studies in Moral Education on Hope

研究代表者
龍崎　忠（Ryuzaki, Tadashi）

岐阜聖徳学園大学・教育学部・准教授

研究者番号：８０３４０３８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,300,000円、（間接経費）　390,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、希望を主題とする道徳教育論を形成しその実践を省察的に創造する目的で展開されたものである。人間形成における希望を正当に評価し、人としての在り方や生き方に不可欠なものとして位置づけることは、道徳教育が引き取るべき急務の課題である。具体的には、一方で近年のアメリカ合衆国の教育哲学や教育理論の動向を丁寧に検討することを通じて、また他方で日本の学校教育での具体的なカリキュラム開発や指導計画の作成、さらには授業分析といった実践的な視点を交えることを通じて、希望こそが道徳教育の１つの重要なテーマとなりうることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study is intended to develop the theory and practice of moral education on the subject of hope, which is often dismissed in schools. It is highly important to inquire the meaning of hope in human relationships and human becomings, because it is vital and integral part of life and existence as a human beings. More specifically, this study aims at both the reconsideration of recent trends in educational theory of the United States and the creation of teaching models and curriculum in elementary schools.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：道徳教育　希望　ジョン・デューイ　プラグマティズム　人間形成

１．研究開始当初の背景

近年のアメリカ合衆国の教育学、とりわけ道徳教育の理論と実践との両面で改めて注目を集めているのが、児童生徒が成長の過程においてより高い希望を抱くことの意味、またそのような希望を育む指導や授業のあり方である。本研究が主に依拠するアメリカの道徳教育論は、より限定的に言えば、プラグマティズムの教育哲学の大家であるジョン・デューイの教育学の再興（いわゆるデューイ・ルネサンス）と深く関わっていて、デューイが言うところの相互成長を１つのモデルにして展開していると言える。デューイ・ルネサンスの波は、道徳教育の理論や実践にまで影響を及ぼし始めている。

日本の道徳教育では、例えば小学校学習指導要領の道徳の内容で、高学年段階で「より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する」、そして中学校学習指導要領の道徳の内容において、「より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ」ことに大きな意味が置かれている事実を想起できる。これらは主として自分自身に関する内容であって、個々の児童生徒にとって、やり抜いて達成することで自信や満足、意欲が生じ、さらなる高みをめざそうとする不撓不屈の態度や意欲を実現しようと努めることに焦点が当てられている。もちろんこの内容を道徳授業の主題として、創意工夫を凝らした授業実践も散見される。

翻ってもう一度近年のアメリカの道徳教育論の動向に目を戻してみると、実際は、希望を個にとどめてしまうのではなく、すなわち希望を個人の主観的な実感に還元して理解しようとするのではなく、他者とともにあるという現実から紡ぎ出されるものとして捉えていることに気づかされる。希望は他者とともに抱くべきものだという観点がきわめて重要であることを改めて主張した研究がアメリカ教育学に現れはじめたのである。その１つが、スティーブン・フィッシュマンとルシール・マッカーシーの共著である(Fishman, Stephen M. and McCarthy, Lucille, *John Dewey and the Philosophy and Practice of Hope* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2007)。フィッシュマンらによれば、希望はまずは私たち個々の人間が他のあらゆる事物とつながっているという事実に対して「感謝の気持ちを抱くこと(gratitude)(p.7)」から生まれてくると言う。ネル・ノディングズが著した『ケアリング』（Noddings, Nel. *Caring: A Feminine approach to ethics and moral education* (Berkeley: University of California Press, 1984)以後、「関係性(relation/relatedness)」をテーマとしてアメリカの道徳教育は展開していると概括できるけれども、フィッシュマンらの研究はここに希望や民主主義という視点を組み込んだ点でユニークであり、また実際に高く評価されている。

２．研究の目的

本研究は、希望を主題とする道徳教育論を形成しその実践を省察的に創造する目的で展開されるものである。人間形成における希望を正当に評価し、人としての在り方や生き方に不可欠なものとして位置づけることは、道徳教育が引き取るべき急務の課題である。具体的には、一方で近年のアメリカ合衆国の教育哲学や教育理論の動向を丁寧に検討することを通じて、また他方で日本の学校教育での具体的なカリキュラム開発や指導計画の作成、さらには授業分析といった実践的な視点を交えることを通じて、希望こそが道徳教育の１つの重要なテーマとなりうることを明らかにする。

日本の道徳教育では、希望の背後にあるはずの絶望や受苦を意味あるものとして位置づける試みはそれほど盛んではない。むしろ、老病死に代表されるように、それらをできる限り疎遠なものと考えようとする風潮を指摘できるだろう。よって、アメリカの希望や絶望をめぐる議論を再度参照しつつ、理論的に正当性を根拠づけられた希望についての道徳教育の新たな方向性に、深い示唆を与えることを独創的な点と考える。

また、「生きる力」を重視する昨今のわが国の道徳教育に対しては、希望に基づく道徳教育は他者との共存や相互成長をめざすようなかたちで展開するものであり、生涯にわたる人間形成を考える点においても、深く広く示唆を与えるものだと位置づけられるだろう。

３．研究の方法

理論面での文献研究が実践面での授業研究をいっそう深め、また逆に丁寧な授業分析が理論研究をより深いものにするためには、これら相互が刺激し合うような循環的な研究方法を常に意識して、本研究の目的を達成させた。３年間の研究の遂行では、①基礎的な文献の講読ととりまとめ　②授業実践のための指導計画の立案と授業実施　③これらに関する検討会の開催やインタビュー調査　④関連する所属学会での成果の報告と論文投稿　を主たる方法とした。

４．研究成果

先述のような学術的背景のなかで、アメリカ合衆国の道徳教育の動向を包括的に視野に置きながら、希望を他者とともに探究する相互成長の道徳教育モデルを探究することが本研究の特色である。また生成されたモデルを授業という教育実践の場面で絶えず試行させることによって、希望に根ざした相互成長という観点から道徳教育論を再考し、そ

の意義を問い続けることも本研究の特色である。得られた成果を経過年ごとに示す。

平成 23 年度は「希望の道徳教育論の原理の探究」に重点的に取り組み、１つは文献研究として、ケアの倫理の思想家であるノディングズ、希望を再評価してデューイの教育哲学を再構築するフィッシュマンとマッカーシーによる先行研究を主たる対象として取り上げて検討した。これらに加えて、ナラティヴ的探究を唱えるカナダのクランディニンの研究動向にも着目した。またデューイ自身の哲学・倫理学を、とくに『人間性と行為』に引きつけて再考し、人間が道徳的に生きることの意味を近年の環境プラグマティズムでの議論や希望論でのトピックと関連づけて理解を深めてきた。以上については関連する学会に参加して研究報告をいくつか行うことができた。

いま１つは実践研究を深める足がかりとして、岐阜市近隣や附属の小中学校で行われた道徳授業の研究公表会へ参加し、新しい学習指導要領のもとで展開されている道徳の授業の実際と課題を検討した。あわせて自身が所属する大学で教職科目の一部として担当する道徳教育の指導法の講義のあり方を省察した。これらについても関係する学会に参加し実践報告として深めることができた。

24 年度は重点的な課題として「希望を主題とする道徳教育の活動的実践」に取り組み、１つに文献研究として、本研究に関連する分野である心理学でのポジティブ心理学、また社会学での希望学やナラティヴ社会学といった新たな動向について検討した。これらの動向から浮かび上がるのは、いかに道徳教育や人間形成の原理を再構築するかという課題であった。プラグマティックな人間観と関連づけてみると、希望を抱くことがよりよい自己をめざし相互に成長することと重なり合うのである。この点については、昨年度から引き続いてとくにデューイの『人間性と行為』に引きつけて再検討を試み、学会にて成果の報告を果たした。

２つには、実践研究を深めるために、昨年度から継続して、岐阜市近隣や附属の小中学校で行われた道徳授業の研究公表会などに参加し、実際の道徳の授業の実際と課題を検討した。あわせて自身が所属する大学で教職科目の一部として担当する道徳教育の指導法の講義のなかで、希望を主題としうる道徳の授業案を提示した。授業実践の論理立てをも射程に入れて本研究を進められたことが成果である。

25 年度は、重点的には「希望を主題とする道徳教育論の形成」として、以下３点で展開した。１つは理論研究として希望を人間の民主的な生き方に引きつけて検討してきた。具体的にはプラグマティズムの教育哲学者であるウェストブルックやノディングズの緒論を再考した。この点については継続的な課題であるデューイの『人間性と行為』を再読する作業とも重ねることができた。

２つにはフロムの人間形成論に特徴的な「有る様式」としての生き方がわが国の道徳教育に与えてくれる示唆について考察した。他者の成功や成就を期待することは日常的に誰もが経験することであるけれども、そうした期待感の背後に潜むある種の無慈悲さについて検討した。

３つは実践的な課題の解明として、岐阜市近隣や附属の小中学校で行われた研究公表会の道徳授業に関わったり、実際に小学校の講師として児童に希望の道徳について語ったりする機会を得た。後者については岐阜県安八町の小学校で、他者と手をつなぐというスキルトレーニングも交えながら、他者と手を携えることで感じられる希望の意味について考えることができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 ２ 件）

<u>龍崎　忠</u>、大学で「教育する」という経験とデューイ、教育思想史学会『近代教育フォーラム』第 21 巻、2012 年、202-205 頁

<u>龍崎　忠</u>、過剰な期待の教育、求めない道徳、あいち県民教育研究所年報『あいちの子育てと教育と文化』第 21 巻、2013 年、39-44 頁

〔学会発表〕（計 ５ 件）

<u>龍崎　忠</u>、デューイの環境哲学(招待講演)、第 103 回公共哲学京都フォーラム、2011 年 6 月 12 日、神戸ポートピアホテル

<u>龍崎　忠</u>、大学生と学び合う道徳教育の構想、日本道徳教育学会愛知県支部定期総会、2011 年 7 月 30 日、名城大学 MSAT

<u>龍崎　忠</u>、日本のジョン・デューイ研究におけるナラティブ的探究の位相、日本教育学会第 70 回大会、2011 年 8 月 24 日、千葉大学

<u>龍崎　忠</u>、大学で「教育する」ということとデューイ、教育思想史学会第 21 回大会、2011 年 9 月 19 日、日本大学

<u>龍崎　忠</u>、臨床教育学の動向とデューイ(6)：人間理解の原論をめぐって、日本デューイ学会第 56 回大会、2012 年 9 月 22 日、東洋大学

〔図書〕（計 ０ 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 ０ 件）

○取得状況（計 ０ 件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
　龍崎　忠（岐阜聖徳学園大学教育学部准教授）
　研究者番号：80340389